

パスカルの「意志」について

綾 部 友 治 郎

Sur la «Volonté» de Pascal

TOMOJIRO AYABÉ

序

パンセにおけるパスカルの「愛」は、「キリスト者の神」の愛の確証という1点を目ざして、ゆるぎない、高いものを実証的に追求した。しかしその過程において、「理性」の力を「つよく制限」¹⁾せざるをえなかった。この間の経緯についてはすでに述べたことがあるが、²⁾今回はそれに引き続き、パスカルの「意志」について考えてみたい。

I

これはパスカルの「愛」および「理性」を論ずるにあたってもいえることであるが、その「意志」について考える場合、彼の人間観、さらにさかのぼってはパスカル自身の、個人的・具体的存在の仕方が問題となってくる。もし「人間存在の空間的・時間的構造は風土性歴史性として己れを現はしてくる」³⁾ものとするならば、パスカルの生きた「歴史的風土」の考察は、彼の個人的・内面的世界の追求に欠くことのできない要素であろう。しかしここでは問題を本論に必要な範囲にかぎり、略述するにとどめたい。

テーヌのいわゆる *le milieu* をその *climat* の点からパスカルに眺めるとき、その生地 Auvergne は、土地やせ、寒暑の差は甚しく、物産に乏しい僻地であった。ライ麦と燕の2000年、この土地においては飢えが、いわばその特徴であり、シンボルであったのである。⁴⁾その住民は極端に走らねばやまぬ性格をもち、詩的センスには欠け、実利的精神にみちている。その主都 Clermont に、古き高き家格をほこるペリエ家、パスカル家の人々は、峻厳にして、責務感旺盛、勤儉力行、働いてうまず、ジャンセニスムの風をおび、神と資産の許す余裕はたのしむが、一切の虚飾に対しては敵意を示すのであった。⁵⁾

このストイックな、意志的な環境からパスカルは生まれたのである。

つぎにおなじくテーヌに従って、政治的諸情勢および社会的諸条件を一瞥すると、パスカルの生れた翌年1624年はリシュリューが執政の座についた年であり、そのあとを継いだマザランの歿した翌年すなわち1662年はパスカルが天に帰した年なのであるから、彼の一生はこの両宰相の治下にあったといえる。これはルイ14世による絶対王制確立への準備時代であり、外征と内乱と、陰謀と野心との時代であった。思うに、リシュリューの時代は彼が王の大砲に彫らしめた銘の«*Ultima ratio regum*»⁶⁾につき、マザランの時代は、ラ・ロシュフーコー公の«*Nos vertus ne sont le plus*

1) 近藤洋逸、デカルトの自然像。岩波書店。282頁。1960。参照。

2) 拙稿、パスカルの「愛」について、岩手大学芸学部研究年報。第15巻。1959。

拙稿、パスカルの *Raison* について。東北大学フ

ランス文学会。Regards. No. 5. 1960。

3) 和辻哲郎：風土。岩波書店。16頁。1935。

4) 5) Georges Conchon, Auvergne 《Les Albums des Guides Bleus》P.19.26. 1959。

6) 《C'est le roi qui décide finalement.》

souvent que des vices déguisés》¹⁾に尽きるといえよう。しかしこの時代こそは、コルネイユとデカルト、そしてパスカルの時代であったのである。

歴史をすべて神の意志のあらわれとみる立場に立てばすなわちやむ、いやしくも人間をその中心におく以上、そこに法則的なものを認めつつも、なおその根柢に人間の自由な意志と、その行為の創造とを否認するわけにはいかない。そしてこの動揺と不安の時代こそは人間の、なし、あるいははなさざる意慾が、はばかるところなく、相たたかった時ではあるまいか。

II

しかしながら若き日のパスカルの描いた人間像は「人間精神の尽きることのない豊饒さはたえまなく生産し、その創意は終ることも絶えることもありえぬ」²⁾と楽観的である。しかし最後の筆をとっては「われわれは渺々たる中間の波間に漂い、つねに定めなく浮動しつつ、一方の端から他方の端へ押し流されている。……われわれは、固い地盤と、究極の揺ぎなき根柢を得て、その上に、無限に高くそびえ立つ一つの塔を築きたいと熱望している。だが、われわれのすべての基礎はひびき割れ、大地は裂けて深淵となる。」³⁾といて、絶望的な、悲観主義の色が濃い。

かかる変化の理由として、当時の時代的風潮の中に悲観主義のあったことをボーダンは指摘する。⁴⁾彼によれば、プロテスタントおよびジャンセニスト達の教義が人間性をそこない、宗教戦争およびフロンドの乱が心身に絶えざる圧迫を加えたためとあるが、パスカルの場合は、こうした社会的、外的諸因にかたて加えて、個人的、内的理由があったのである。

その第一は健康の衰えである。パスカルが「キリスト教弁証論」執筆に着手したのが、ラフュマのいうごとく⁵⁾1656年の頃であったとすれば、パスカルの姉ペリエ夫人が、「……この企てにとりかかることを妨げたのは彼の病気であった。この企てに専念しはじめたのは35歳のころである。ほかの仕事がゆるす範囲の方法で、まる1年かかってその準備をしたのであるが……ところが1年後、それは弟が満35歳のときであり、隠遁後5カ年目であったが、弟の病気が再発し、あまりのはげしさに、なお生きのこった4年間というもの——この4年をすごすあいだのあの哀れな衰弱状態を、あえて『生きる』と呼ぶならば——弟はもう何もすることはできなかった。」⁶⁾という所とはほぼ一致し、癒えることなきその病苦の、一進一退しつつもついにその手を緩めなかったことを知るのである。

第二にプロヴァンシャル論争のいた手である。元来この種の論争は第三者の立場よりすれば、いづれが勝っても勝ったことにはならないのであるが、打てば打たれるならないながら、その受けるいた手は己れによって己れが打たれた場合にもっとも深いのである。この論争において、最大の被害者はパスカル自身であったのではあるまいか。彼がカルヴァンのごときタイプとはおよそ対蹠的な、ナイーブな、傷きやすい心情の持主であっただけ、騎虎の勢、やむにやまれずとび込んだ論争ではあったが、19回にわたって論陣をはるうちに、そのいつはてるともない抗論のやりとりに、次第に最初の意欲を失っていったのである。第19回、最後の手紙の中に見られる、「しかしあなたも過つことはありえたのです。わたしは、自分が過ちえたと思ふことを誓います。しかし、わたしは、

1) La Rochefoucauld : Réflexions ou sentences et maximes morales.

2) 真空論序言 これはパスカルの24才から28才の間に書かれたものと推定される。パスカル全集。I。人文書院。67頁。1959。

3) パンセ。同上。III。断章。72。

4) E. Baudin : Etudes historiques et critiques

sur la philosophie de Pascal. II. Sa philosophie morale. p. 171.

5) L. Lafuma : Pensées. édition intégrale. Avant-propos. Delmas. 1952.

6) ibid. La vie de Monsieur Pascal, écrite par Madame Périer. p.49, 50.

パスカル全集。I。27頁。

自分が過つたと信ずるとは誓いません。あなたにすべてを申し上げる気はありません。わたしは、ただ、1つの話をするだけです。」¹⁾ のごときは他人に聞かせる言葉ではない。追いつめられた者の傷心のつぶやきである。外からの圧迫、干渉はまだよいのである。この論争の後、彼をおそった虚無感、自己嫌悪は仮借なくその胸奥を噛んで、それはまさに「一つの転機」²⁾ あるいは「第三の回心」³⁾ ともいうべき危期であったと思われる。

「プロヴァンシアル」に対する圧迫はすなわちジャンセニスムの弾圧であり、教皇と王とを背後の力とする圧力の前には、ポール・ロワイヤルもついに屈するのであるが、パスカルはあくまで真理を守ってゆずらず、アルノー、ニコル等の盟友とも袂をわかつのやむなきにいたる。しかもその最中に、彼の信仰の先達、妹ジャックリーヌを失うのである。

実にパンセはこのような生理的、心理的負荷の下に書かれたのである。しからばこれに屈せず、これに打ちかつパスカルの意力はどこから来たのであろうか？ 次の一節はその源を示してあやまりなきものと信ずる。

「かれら（パスカルおよびその一派）は少しもおのれを過信せず、ひたすら教会の力を敬い、平和を愛し、真理への愛と情熱にもえ、真理を知ってこれを擁護せんことを切望し、おのれの弱さにおののき、かかる試練のうちにおかれたことを悲しみつつも、なお神がその力と光によりささえ給い、おのれの奉ずるイエス・キリストの恩寵——このためにこそかれらは苦しみに堪えているのです——そのものが、かれらを導く光となり力となることを切に待ち望んでおります。要するに、わたしはキリスト教を信ずることが力（force）を生み出すゆえんであることをかれらにおいてみたのであります。」⁴⁾

III

しからばパンセにおいては、パスカルは人間をいかに見、いかに類別したか？

「そもそも人間は自然のうちにおいて何ものであろうか？無限に比しては虚無、虚無に比しては全体。無と全体とのあいだの中間者。両極を把握することからは無限に遠く隔てられているので、事物の終極やその始原は、人間にとっては、所詮、底しれぬ神秘のうちに隠されている。彼は自分がそこから引き出されてきた虚無をも、そこへ呑みこまれていく無限をも、ともに見ることができない。」⁵⁾ これは「認識の順序」⁶⁾ l'ordre du connaître の中における人間の姿である。「存在の順序」⁷⁾ l'ordre de l'être の中においてはどうか？

「人間は天使でもなければ禽獣でもない。天使になろうとする者が禽獣になるのは、不幸なことである。」⁸⁾

「われわれと、地獄あるいは天国とのあいだには、この世で最も脆い生命が中間的に存在しているだけである。」⁹⁾

「もし人が、高慢、野心、邪欲、弱さ、悲惨、不正にみちている自己を知らないならば、彼はよほどのめくらである。またもし、それを知っていながら、それから解き放たれることを欲しないならば、そういう人については何といったらよかろうか。」¹⁰⁾ 1は天国と天使、他は地獄と禽獣、この

1) Pascal : Oeuvres complètes Biblio. de la Pléiade. Les Provinciales. p. 904. 1954.
パスカル全集。II。415頁。
2) L. Goldmann : Le dieu caché. Lib.Gallimard. p. 190. 1955.
3) F. Mauriac : Blaise Pascal et sa sœur Jacqueline. Hachette p. 196. 1947.
4) Pascal : Oeuvres complètes. Biblio. de la

Pléiade. Les Provinciales. p. 904. 1954.
パスカル全集、II、414頁。
5) 断章。72。
6). 7) 長沢信寿、アウグステイヌス哲学の研究。創文社。1960。140頁参照
8) 断章。358。
9) 断章。213。
10) 断章。450。

両極の中間に人間は存在するのである。その生命は脆く、もろもろの悲惨にみちている。この人間は不幸であるとするパスカルの悲観主義は、人の多く指摘するところである。¹⁾

「人間の偉大は、彼の悲惨からしてもそれを引き出すことができるほどにいちじるしい。なぜなら、われわれは、動物において自然であることを、人間においては悲惨と呼ぶからである。そのことから、われわれは、人間の自然性は今日では動物のそれと等しいとはいえ、かつては彼自身のものであった—そうすぐれた自然性から、墮落したのだということを認める。そもそも位を奪われた国王でなくして、誰が国王でないことを不幸だと思うであろうか？」²⁾

人間の不幸は「位を奪われた国王」³⁾が現在国王でない事について「意識する」⁴⁾不幸なのである。人間は「墮落した」がゆえに不幸なのであって、その多数に共通に見られる現実の相よりすれば「低劣であり下等である」⁵⁾が、そのめざすところよりすれば「偉大」である。ゆえに「人間は自己を禽獣にひとしいと思ってはならないし、天使にひとしいと思ってもならない。そのいずれを知らずにもいけぬ。両方をもとに知るべきである。」⁶⁾そして「真の善を求めて無益にも疲れはてるのは、よいことである。その結果、救い主に腕を差しのべることになるであろうから。」⁷⁾「私は、呻吟しつつ求める人々をしかは認することができない。」⁸⁾禽獣と神とをつらねる一線の上に位置し「失われた神と、墮落した本性」⁹⁾を「意識し」、「呻吟しつつ求める」人々こそ、パスカルのよしとする人間の姿である。

人間を精神的存在としてのみ眺めたパスカルの眼からは、社会における階級もまた人間精神の形態と構造とを反映するものでなければならなかった。

「あなたが公爵であるからといって、わたしはあなたを尊敬する必要はない。ただあなたに敬礼すればよい。もしあなたが公爵でかつ紳士¹⁰⁾であったならば、わたしはそのような資格の双方にたいして払うべきものを払うであろう。……しかし、あなたが公爵ではあっても紳士でなかったら、わたしはやはり正当なことをするであろう。すなわち、人間の秩序があなたの家柄に結びつけた外的義務をつくすと共にあなたの精神の下劣さに値いする内的軽侮をいただくことを忘れぬであろう。」¹¹⁾

パスカルはここで、1人の貴族にたいし、人間の秩序と精神の秩序の両点から別個の評価を下している。また、自己の発明にかかる計算器を、スエーデンのクリスチナ女王へ献じたその献呈の辞¹²⁾において、かれは、学問に秀でた人々と、国家の元首とを対比し、すぐれた精神の、みずからより劣った精神に対して説得の権利を行使することは、あたかも帝王の臣下に対するがごときものであること、しかもこの精神の王国は、精神が肉体よりもはるかに上位の秩序に属するものなるが故に、それだけ高位の秩序に属するものであることを述べている。

この「秩序」ordreの考え方はパンセにおける有名な「3つの秩序」¹³⁾に展開するのであるが、引用をさけて要旨をまとめると。

1) たとえばボードン、ヴァレリー、シエストフのごとき。
2) 断章. 409.
3) " 398, 409.
4) " 399 「人は意識しなければ sans sentiment 悲惨ではない」.
5) " 415.
6) " 418.
7) " 422.
8) " 421.
9) " 441.

10) honnête homme.
11) Trois discours sur la condition des grands. Oeuvres complètes. Biblio. de la Pléiade. p.619. パスカル全集. I. 166頁. 貴族の身分について. 第二講話.
12) Lettre à la sérénissime de Suède. Oeuvres complètes. Biblio. de la Pléiade. p.502. パスカル全集. I. 303頁. パスカルからクリスチナ女王へ.
13) 断章. 460, 793.

- A. 精神. esprits. これは知識欲ある人, 学者たちの対象, 知識欲が支配する。
 B. 肉体. corps, chair. これは王者, 富豪, 将軍たちの対象, 邪欲が支配する。
 C. 意志. volonté, 知恵. sagesse. 賢者たちは正義を対象とする。知恵においては誇りが支配する。しかし知恵を与えるものは神のみである。

Bは物質的, 世俗の世界であり, そこに住む者の眼にはAの世界の偉大さはわからない。また, 神よりくる以外にはありえない知恵の偉大は。AおよびBの世界の人々には見られない。聖徒はCに属し, 神と天使から見られる。

また「ある人々は真の善を権威に求め, ある人々はそれを探求心と知識に求め, ある人々はそれを逸楽に求める」¹⁾とあるところから, Cにおける価値判断の規準は権威にあることがわかり, 「われわれは一体何によって事実の真理を知るのでしょうか。それは神父様, 真理の正統な審判者たる眼によるのであります。それは, あたかも, 理性が自然のおよび理知の事物の審判者であり, 信仰が超自然のおよび啓示の事物の審判者であると同様であります。」²⁾とあることによって, Aに理性, Bに眼, Cに信仰がそれぞれ審判者 *les légitimes juges* として配当されていることを知るのである。これは人間の認識の3原理を, 聖アウグスチヌスと聖トマスとによって感覚, 理性, 信仰となすにもとずくのである。³⁾

つぎにBすなわち肉体的, 感官の秩序と, Cすなわち権威, 信仰, 知恵の秩序との関係をたずねると, 上記の引用文に続いて, 「神は信仰へ導かんがため感覚を媒介になさろうとしたのですから *Fides ex auditu*⁴⁾ 信仰は感覚の確実性を破壊するどころか, むしろ, 感覚の忠実な証言を疑おうとするならば, かえって信仰を破壊することになりましょう」とあることによって, BとCとは結びつくのである。しかし, 思うに, イエス・キリストは, Bにおいて「悲惨」, Cにおいて「偉大」ではなかったか。それゆえにこそ「自己の悲惨を知らずに神を知ることは, 傲慢を生む。神を知らずに自己の悲惨を知ることは絶望を生む。イエス・キリストを知ることは中間をなす。というのわれわれはそこに神と, われわれの悲惨とを見いだすからである。」⁵⁾ 仲保者 *Médiateur* という考えはここに生まれる。「神とわれわれとのあいだには如何ともなしがたい対立があり, 仲保者がなかったならば, 両者のあいだには何の交わりもありえない, ということを経験するところこそ, 真の回心はある。」⁶⁾

B, Cをつらねる一線は, かくしてイエス・キリストを仲保者として, 神につらなるのである。

つぎに筆者はAについて説くべきであろう。そして有名な「幾何学的な精神と繊細な精神」についても論ずべきであろうが, 「理性」についてすでに述べたこともあり, ここでは詳説することを控えたい。結論的にいえば, 「理性の服従と理性の運用。そこに真のキリスト教がある。」⁷⁾ につきるのであって, B, Aをつらねて真理をめざす知性, *raison* の線と, B, Cを結んで神の恩寵を仰がんとする信仰, *amour* の線とは, 一応別個のものと考えたい。有名な「賭け」の断章において, パスカルの失うかも知れないもの2つ, 真と善 *le vrai et le bien*. 賭けるものは2つ, 君の理性と君の意志 *votre raison et votre volonté*, つまり君の認識と君の幸福である。そして君の本性が

1) 断章. 425.

2) *Les Provinciales, Dix-huitième lettre. Oeuvres complètes. Biblio. de la Pléiade. p.897*
 パスカル全集. II. 403頁.

3) 同上 さりながらパスカルのこの3秩序の *schéma* に, 当時のフランスの世相が影を投じていなかったとはいえず。ランソンも哲学者, 博識の士の一団と世俗の人, 宮廷人および婦人たちの一団とを分け,

(フランス文学史, 448頁)。ルフェーブルも「パスカルの序界の構成は中央集権化された国家もしくは教会の階級構成に似ている」といっている (パスカル, 川俣晃自訳, 新評論社, 1954. 180頁)。

4) 「ロマ書」第10章17節「然れば信仰は聞くよりいで, 聞くところは神の道 (ことば) に由れるなり」。

5) 断章. 527.

6) " . 470.

7) " . 269.

避けようとするものは2つ、誤謬と悲惨である。どうしても選ばなければならないからには、他方を措いて一方を選んだところで、君の理性は別に傷つけられるわけではない。これで1つの点が片づいた。Voilà un point vidé. だが君の幸福 béatitude はどうなるか？」¹⁾ といっているところによっても、かれ自身, vrai - raison - connaissance - erreur と bien - volonté - béatitude - misère との2系列を考えていたことがわかる。そして神の存否が「賭け」られるのは後者の系列においてである。

IV

さりながら、アウグスティヌスの哲学においては、信仰と知性とは非連続の連続として断ち切ることの許されない円環を形成しているといわれる。²⁾アウグスティヌスを学ぶこと深く、その強い影響を受けたパスカルに、同様な思考経路がなかったと断定することは危険である。³⁾

王、将軍、富豪をその代表者とするBの世界は、要するに現実の人間社会そのものに他ならない。このBを、B、Cをつらねる秩序——これは心情 *coeur* の秩序であり、イエス・キリスト、聖パウロのもつ愛 *amour* の秩序であるが⁴⁾ ——に立って眺めるとき、神に似たものとされ、その神性にあずかるものとされた人間は、失墜し、墮落と罪の状態においては、禽獣に似たものとなっている。⁵⁾しかもこの秩序は「人間に対して、かれが下劣なものであり、憎むべきものでさえもあることを認めるように命じておきながら、他方では、神に似たものになろうとするように命じる。」⁶⁾のである。

この召命に应ぜず、「永遠の約束たる真理を願い求めないことほど、心の素質の悪さ *mauvaise disposition du coeur* を示すものはない。」⁷⁾ところがこの部分の下書としてパスカルが口述、筆記させたと思われる断章⁸⁾には「意志の悪さ」*malice dans la volonté* となっているのである。しからば「意志」とは何であるか？

パスカルの「意志」について考察する場合、見落とすことのできない断章はつぎの2つである。

「精神は、自然的に信じる。意志は、自然的に愛する。したがって、真の対象がないと、精神や意志は誤った対象に執着せざるをえなくなる。」⁹⁾

「意志の行為と、その他のあらゆる行為とのあいだには、普遍的、本質的な差異がある。意志は信仰の主要な器官の1つである。というのも、意志が信仰を形成するからではなく、事物はそれがどの面から見られるかによって、真ともなれば偽ともなるからである。意志は、事物のある面を他の面よりも好むので、自分の見たくない事物の諸性質を、精神に考察させないように仕向ける。そこで精神は、意志と相携えて歩み、意志の好む面を見るだけで満足し、かくして自分の見たところによって事物を判断する。」¹⁰⁾

以上いずれの断章も、意志の本質を精神 *esprit* と関連させて説いている。この点に関し、ブランシュヴィックは、後章の注で、¹¹⁾意志と精神——的確にいえば知性 *intelligence* であるが、——は対立するのである。普通の用法、たとえばデカルトによれば、¹²⁾意志に判断を割り当てている。意志

1) 断章. 233.

2) 長沢信寿, アウグスティヌス哲学の研究, 創文社. 1960. 248頁.

3) 岳野慶作, 「多くの論者は、パスカルをジャンセニストと見なしている。しかしそのような見方が正しいか疑問に思う。むしろ、パスカルはアウグスチヌスのカトリックの一人であったと見る方が正しいのではあるまいか。」パスカル全集 II. 628頁.

4) 断章. 283.

5) " 434.

6) " 537.

7) 断章. 194.

8) " 194. 乙.

9) " 81.

10) " 99.

11) L. Brunschvicg : *Blaise Pascal, Pensées et opuscules*. Hachette. p.375.

12) 「意志というものはただ、われわれが或る一つのことを為すもしくは為さぬ(いいかえると、肯定するもしくは否定する、追求するもしくは忌避する)ことができるというところのみ存するのである。」デカルト. 省察. 4. 真と偽とについて.

は選択の抽象的な能力ではなく、それは内容によって決定されるのである。意志は実践的な関心であり、欲望である。関心や欲望というものは、真理の問題に関しては直接発言はしないのである、といっているが、この「精神」を、おなじデカルトの、「悟性によってわれわれに提供されるものをわれわれが肯定もしくは否定し、すなわち追求もしくは忌避するにあたって、なんら外的な力に強いられてそうするのではないと感ずるようなふうにしてこれをおこなうところのみ、意志は存するのである。」¹⁾ という時の悟性 *l'entendement* の意味にとって理解したらどうであろうか、意志と精神とは、その意味においては、本質的に相結ぶべき性質のもののように考えられるのである。

一体、われわれの全活動には、知的、精神的活動においても、本能的、感性的活動においても、その根柢に、生物に本性的な生の欲望がひそみ、これが未来へと前進させるのである。この傾向は低い動物的段階においては盲目的であるが、人間の段階に達すると少しずつ精神と理性がこれにくわわる。この変化をおし進める力は本質において変りはなく、圧殺もされず、創造もされない。精神はそのエネルギーをその出現以前から存在している生命的衝動からうけるのである。真、善、美および神への思慕も、全生物に本性的な生の欲望の顕現に他ならぬのである。²⁾

ゆえに、広義の意志は、それ自体としては、盲目的な力であり、知能とは別であって、これを知識と同一視したり、それに依存すると考えることは誤りであろう。しかし意志を、意識された目標をもち、これを追求し、行動的にそれに到達せんとする意識的な精神作用であるとすれば、また、善を志向する道徳的行動においてのみ、人間はその全意志をもって意志することができるのであるとすれば、³⁾ 意志は、その出発点において、すでに精神を、悟性を媒介しなかったであろうか？

パスカルはいう、「欲望と力とは、われわれのあらゆる行為のみなもとである。欲望は意志的な行為をさせ、力は不本意な行為をさせる。」⁴⁾ しかるに、「すべての人間は幸福になることを求めている。このことには例外がない。そのために用いる手段はいかに異なっていようと、彼らはみなこの目的に向かっている。……意志はこの目的に向かってでなければ、一步も前へ進まない。」⁵⁾ しかし「われわれは生まれつき不正である。なぜなら、すべてが自己へ向かっているからである。このことは、全体の秩序に反する。全般的なものへ向かうのでなければならぬ。自己へ向かう傾きは、戦争においても、政治においても、経済においても、また1人1人の人間の身体においても、あらゆる無秩序のはじまりである。したがって、意志は墮落している。」⁶⁾

元来「人間の意志には欲と愛 *la cupidité et la charité* の2つの原理がある。」⁷⁾ 欲に引かれる意志は、地上の幸福をめざして墮落する。愛をめざし全体に向かい、人間にとって唯一の真の善である神を求めて進む意志、これがパスカルのよしとする意志であったのである。「神は精神よりも意志を傾かせようと欲する。完全な明らかなさは、精神にとっては役立つであろうが、意志にとっては有害であろう。高慢を卑下させること。」⁸⁾ とあるのは精神の否定ではない。信仰の本質から考えて、精神と意志の比重をいったのである。

しかしながら、自己の努力だけで、自己の意志だけではたして人間は所期の高くも遠い目標に到達できるであろうか？「普遍的靈魂の意志」⁹⁾、「全身体を治める第1の意志」¹⁰⁾に、肢体たるものは、そのそれぞれの意志を服従させ、彼らを導く光と力とをまち望まなければならないのである。

1) 同上。Descartes: <i>Méditations</i> . Biblio. de la Pléiade. p. 304.	5) 断章. 425.
2) ポール・フルクキエ, 意志. 白水社. 1954. 49頁参照.	6) " 477.
3) 同上.	7) " 571.
4) 断章. 334.	8) " 581.
	9) " 482.
	10) " 475.

「全体は手を愛する。そして手は、それが意志をもっていたならば、靈魂が手を愛すると同じように、自己を愛すべきであろう。それを越えた愛はすべて不正である。『神につけば1つの霊となる。』われわれはイエス・キリストの肢体であるがゆえに、自己を愛する。われわれは、イエス・キリストが全体であり、われわれがその肢体であるがゆえに、イエス・キリストを愛する。三位一体のように、全体は1つであり、一は他のうちにある。」¹⁾

禽獣にひとしい、悲惨、下劣の境から、神を知り、神を愛して、暗き中にも光を求めて、人間はあゆまねばならない。そのあゆむ力が意志であり、その力の源は神にある。信仰の力である。筆者は「信仰は意志である」と断じた一神父の言葉をいまだに忘れない。

V

ロウタッケルの層説 Schichtenlehre によれば、²⁾ 人間の行動の根柢には大別して3つの層がある。概括的にいえば、本能的・衝動的・情緒的・(情動的)行動は中枢神経系統の古い部分に根柢をもつ深層的な行動であり、知性・思考・意志・自我意識などは中枢の新しい部分に根柢をもつ上層の行動である。そして中間に幼時から形成されてきた習慣や傾向性の層がある。換言すれば、深層はフロイドのいわゆるエスESで、これは生物的なもの、われわれのうちなる動物、小児的なものである。中層は Person の段階で、これは過去の教育、習慣など社会的・文化的条件によって形成される。そして、社会的な場における人間の生活活動の一樣相としての宗教も、主としてこの段階において対象となるのである。もちろん、これは幼時においてすでに神を求めるといった事実を否定するものではない。しかしこれは無自覚になされたことである。また信仰、宗教的信念といったものは意志的なものであって、これはつぎの上層の段階に属することもあきらかである。この中層の段階における習慣のもつ意義を、意志との関連において、パスカルによって考えてみたい。

「信じるには、3つの手段がある。理性、習慣、靈感 l'inspiration がそれである。キリスト教は理性をもつ唯一の宗教ではあるが、靈感なしに信じる者を、己が真の子とは認めない。そうかといって、キリスト教は理性と習慣を排除するのではない。むしろ反対である、証拠に対して自己の精神を開き、習慣によって確信をかためることが必要であるとともに、また謙遜によって靈感に身を委ねることが必要である。靈感のみが、真の有効な結果をもたらすことができるからである。」³⁾

「神から受けとるためには、外的なものを、内的なものに結びつけなければならない。いいかえれば、ひざまずく、口で祈りをとなえる、等。それは、神に服従しようとしなかった傲慢な人間を、いまや被造物に服従させるためである。そういう外的なものから助力を期待するのは、迷信的であるが、その外的なものを内的なものに結びつけようとしなないのは、不遜である。」⁴⁾

「習慣はわれわれの天性 nature である。信仰の習慣をもった人は、その信仰をいただき、地獄を恐れずにはいられなくなり、その他のことを信じない。」⁵⁾

「習慣は第2の天性であり、第1の天性を破壊する。しかしそもそも天性とは何か?なぜ習慣は自然的 naturelle でないのか?私にはどうもそう思われるのであるが、習慣が第2の天性であるように、この天性なるものは第1の習慣にすぎぬのではなからうか?」⁶⁾

人格形成の上に重要な意味をもつ習慣の意義を、パスカルは正確にとらえているのであるが、同時にその限界もはっきり認識しているのである。

「習慣はそれが習慣であるがゆえにのみ従われるべきで、それが合理的 raisonnable であるとか

1) 断章. 483.

2) 北村晴朗: 一般心理学演習. 誠信書房. p.26参照.

3) 断章. 245.

4) 断章. 250.

5) " 89.

6) " 93.

正しい *juste* ということのゆえに従わなければならない。けれども民衆がそれに従っているのは、それを正しいと信じているからこそである。¹⁾

意志、理性、正義の段階は習慣の段階の上である。民衆はⅢにといたBの秩序に属するもの、Cの秩序に属するものでないことは、Aに属さぬこととひとしい。信ぜんと欲するものは、まず己が情欲 *passion* をへらし、「自分が信じていたかのように万事をおこなうことである。聖水を受け、ミサを唱えてもらうことである。そうすれば、おのずと君は信じられるようになるし、*vous abêtira*。」²⁾

問題はこの習慣と意志の関係である。くりかえすが、層説によれば習慣は *Person* の層に属し、意志は、はたらきとしては *Ich* につく。パスカルによれば、Cの秩序に属するものは、意志、信仰、神により与えられる知恵、賢者、正義、権威等であり、Bの秩序に属するものは、肉体、感覚、富者、将軍、国王、財産、邪欲、逸楽等である。層説における中・上層と。B・Cとの間におのずからなる平行関係の見出されることに気付くのである。パスカルにおける *bête* の問題をもっと深くほり下げ、それと「深層」との関係をさぐることは興味深いことであるが、今はしばらくおき、問題を上層の方向に限定して習慣と意志の関係を考えてみる。

ラヴェッソン³⁾によれば、感覚の領域においても、道徳の領域においても、受動と能動との運動を反復するときは、運動は益々正確になると同時に、個々の内容はその意識を喪失するにいたる。そして習慣は第2の天性となるが、意志的、意識的契機は次第に後退するのである。しかしこのことは決して理性の指示するところから乖離するものではない。習慣と本能とはともに理性の法則から出発するのである。反省において、意志において、あらゆる運動の目的は1つの観念であり、理想であり、そこではかかる観念と実在との合一が意図される。習慣は実に漸次かかる観念と実在との合一を将来するものであり、現実的直覚を可能にするのである。意識の後退、意志の消失は習慣を1つの盲目的な機制 *mécanisme aveugle* に転落せしめるものではなく、そこに支配する法則は神の恩寵の法則 *loi de grâce* であり、それはまた、天性たる欲望の必然性でもある。それは目的因が漸次、動力因を支配し、これを自らのうちに摂取する過程であるともいうことができる。

パスカルはいう、「われわれは精神であると同様に自動機械 *automates* である。……一たび精神が真理の在り場所を知ったならば、たえずわれわれから逃れ去ろうとするこの信仰にわれわれを浸らせ、われわれにそれを染み込ませるためには、習慣に助けを求めなければならない。なぜなら、真理の証拠をつねに眼前に保つのは、わずらわしいことだからである。われわれは、一そう容易な信仰、習慣による信仰をものにしなければならない。それは、無理をせず、技巧を用いず、議論もせず、われわれにことごとく信じさせ、われわれのあらゆる能力をこの信仰に傾かせ、かくしてわれわれの魂を自然にそこへ落ちこませる。……『神よ、わが心を傾かせたまえ。』」⁴⁾

意志において活動は、それ自身を反省し、そこに努力を生じ、さらに主体と客体との分離がおこる。しかるにかかる意志動作が反復されて習慣を生ずるときは、それは再度自然に接近するのである。したがって習慣は意志が漸次自然に接近する微分であり、流率であるとラヴェッソンは考える。この点はパスカルの *notre âme y tombe naturellement* という所と軌を1にする。しかしラヴェッソンが、そこに働く力は常に理性という同一の原理で、この原理はまた逆に生命のあらゆる段階的形式を発展せしめる力でもある。それがすなわち神の理性であり、神の恩寵に他ならぬという所に到っては、パスカルと離れるのである。パスカルは「信仰は神の賜物である。信仰は推理

1) 断章. 325.

2) " . 233. この *vous abêtira* 「馬鹿になれるであろう」については周知のとおり問題があるのであるが、その如何にかかわらず、筆者の論旨には影響

がない。

3) Félix Ravaisson-Mollien, 1813-1900 矢田部達郎, 意志心理学史. 培風館. 1943. p. 565-566.

4) 断章. 252.

raisonnement の賜物であるなどわれわれが知っているとは思ってはならない。」¹⁾といい、「この光に従う人々に、彼らに従わせるのは恩寵であって理性ではないということを知らせる……」²⁾というのである。

思うに恩寵は神のみわざであり、人間のうかがい知るべからざるところである。故に人間にとっては信仰は意志でなければならない。そしてパスカルは信仰の人であった。そしてまた意志の人であったのである。(終)

1) 断章. 279.

2) " 564.